

巻頭言



学会の構造改革

名 取 亮†



世の中には数多くの学会があるが、〇〇学・会と区切るのが自然な学会と〇〇・学会と区切るほうが自然な学会の2通りに分類できるように思われる。皆さんがご存知の学会について考えてみていただきたい。前者の代表的な例は数学会や化学学会である。これは〇〇学という学問がすでに確立している場合で、〇〇学科という学科が多くの大学に存在しているのが普通である。後者はそうでないものということになる。さて、本学会はどちらに分類されるであろうか。「情報処理学」という学問はまだ確立しているとはいえないのではないか。学科名としても情報処理学科というものは少ない。多いのは情報工学科と情報科学科であろう。情報工学科と情報科学科の内容はほとんど同じである。その学科が工学部にあるか理学部にあるかの差だけと思ってよい。学科の名前に合わせて学会名を情報工学会あるいは情報科学会とするのはどうであろうか。これらは情報処理学会にくらべて狭いという感じがする。情報処理という言葉には「コンピュータによる」ということが暗黙のうちに含まれている。情報を処理するとは何かというと、情報という言葉の意味が広いために結局、「コンピュータを使って行うもろもろの仕事」および「コンピュータ自体」に関する技術と学問全般を表すことになる。すなわち、コンピュータという道具を中心として、その作り方、使い方、使った結果などすべてを含むことになる。道具を中心とした学会としてはたとえばテレビジョン学会があるが、それはもっぱら作るほうを対象としており、使うほうは含まれない。コンピュータはテレビのような単能機械ではなく万能機械であるために使い方も対象となりうるのである。そのようなわけで本学会の守備範囲は非常に広い。いわゆる情報産業が盛んになるにしたがって情報処理

に携わる人口がどんどん増加している。大学においても情報と名のついている学科だけに止まらず電子工学科、電気工学科、管理工学科、計測工学科をはじめとして多くの学科で「情報処理」について教育し、情報処理に従事する人材を養成している。このような事情を反映して、本学会の会員数は発足以来順調に伸び続け、ついに3万人を突破するに至っている。しかし、数年前から学会は財政的に苦しくなっている。一説によれば、学会の収益は初め（前期）には会員数とともに増大するが、会員数がある数をこえと（後期）逆に会員数とともに減少するのだという。本学会は現在まさに後期の状況に入っているのである。この状況から脱出して、さらにもう一段発展するためには学会の組織や運営方法を抜本的に考え直す「学会の構造改革」が必要なのではないだろうか。一案を述べれば、まず学会の守備範囲をいくつかのグループに分ける。それをたとえば部会または分科会と名づけ、会員は原則としてどれか一つの部会に所属する。各部会は緊密な連繫を保ちながらも、かなりの独立性をもって活動する。財務的には大幅な独立採算制を取り入れる。一方、学会誌、論文誌、欧文誌などの機関誌の編集や共通事務など共通にできるものはそうすることによって経費の節減をはかる。このような体制にすれば、各部会の規模が小さくなり小回りがきくうえそれぞれの部会の特色を出すことも可能になる。会員の要求にもきめ細かく応じることができるので会員数もふえることが期待される。しかも各部会は前期の状態にあるから収益も増大するというわけである。このほかにも改革案はいろいろと考えられるだろう。これから会員の皆さん、役員、そして事務局の知恵を結集してすぐれた案が作られることを期待している。

(平成3年8月22日)

† 本会理事 筑波大学